

---

# ザ・プロジェクト その2

青木弘樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ザ・プロジェクト その2

### 【コード】

N0851S

### 【作者名】

青木弘樹

### 【あらすじ】

ある世界の物語。戦争が終わり、平和になった世界。そこでうめく陰謀と計画とは…？

(前書き)

前回の続きです。

作：青木弘樹

作戦の前日。

マシューは緊張していた。

スペースボックスは今では観光名所にもなっていて、惑星ガーランド、惑星ローランド双方から毎日一便だけシャトルが出ている。

簡単な手続きと身体検査を受ければ乗ることが出来るが、宇宙空間における身体への影響を考えて子供や老人は乗ることは出来ない。具体的には18歳未満の人間および60歳以上の人間は乗ることが出来ない。また重度の身体障害者も無理だ。

マシューは左目が見えないが、それくらいなら乗ることが出来る。

作戦当日。22日。

午前9時に出発するシャトルに影の組織のメンバーは乗っていた。メンバー10人のうち、7人が乗っていた。ボスであるガイ、そしてレイミアもいた。

「大丈夫か？マシュー」

ガイが話しかけた。

「はい、なんとか…」

「冷静にな。慎重に行動するんだ」

「はい。ひとつ聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「やつらはどうやって強盗をするんでしょうか？銃器は持ち込めませんよね？スペースボックスの管理局のセキュリティはしっかりしてるだろうし、俺たちだって銃器は持ってきてません」

「分かん…が、管理局にスパイがいるのかもな。そいつが銃器や

小型爆弾を用意しているのかも知れん」

「そうですか…。でも、そうなら俺たちはどうやって戦うんですか？」

「格闘しかないな。あるいは管理局の警備員の持っている武器を奪うか…」

「それは…なかなか厳しいですね…」

「むこうも大掛かりな武器はないはずだ。やるしかないよ」

「…」

3時間後。シャトルはスペールボックスに着いた。

「やつらもおそらくガーランドからシャトルで来てるだろう。みんな気を抜くなよ」

「はい！」

ガイたちは観光客を装い、スペースボックス内を行動した。スペースボックスの大きさは縦3キロメートル、横1キロメートル、高さ10メートルだ。地球で言う地面にあたる部分に人工重力発生装置があり、1Gの重力を作り出している。この技術の開発に成功したことがスペースボックス創設の足がかりになったことは言うまでもない。

中央部分にお金が保存されている建物があり、厳重に警備されている。一応そこも有名なデザイナーがデザインしたとかで観光名所だが、近くにいる人たちを数人の警備員がしつかり見ている。監視カメラの数もハンパじゃない。

帰りのシャトルは夜7時に出発する。夜といってもこのスペースボックスは安全のため窓というものは一切ない。照明で擬似的に朝・昼・夜を作り出している。当初はセキュリティの面から24時間、照明はつけっぱなしだったが、明るさ暗さの概念がないと職員が体調を崩しやすいので、そうなったそうだ。

そして夜6時。あたりは薄暗かった。

「動きがありませんね」

「やっぱりこんな警備じゃ強盗なんて無理なんじゃ…」  
その時！

”ドーン！”  
爆発音がした。

「なんだ!？」

慌ててその場所へ急ぐ影の組織のメンバーたち。

「これは…」

ドアが破壊され、警備員が数人倒れている。警備員の所持していた武器は取られている。

「しまった…う…」

妙な煙があたりに漂っている。おそらくは催涙ガスだ。

「く…」

ガイたちは口元を押さえながら破壊されたドアの中へと入っていた。  
つた。

その時！

”バン！バン！バン！”

何者かが発砲してきた。

「ぐわっ!」「うおっ!」

「シエーン！リック!」

二人の仲間が撃たれた。

”バン！バン！バン!”

なおも撃ってくる敵!

「うわあ!」「ぎゃっ!」

「ジェイル！アドン!」

さらに二人、撃たれてしまった。

「…」

マシユーは震えながらもレイミアをかばっていた。

ガイは奥のほうに人影を見つけた。

「くそっ!」

ガイは隠し持っていたナイフ3本を人影に向かって投げた。

「ぐえ!」「ぐわ!」

二人ほどに命中したようだった。

「マシュー、レイミア、大丈夫か!？」

「は、はい…!」

”タタタタ…”

いくつかの走る足音が聞こえた。そして

”ドーン!”

またしても爆発音が聞こえた。その後

”キーン”

何か小型のシャトルが飛び立つ音が聞こえてきた。

「ま、まさかあいつら…自分たち用の小型シャトルを…」

「ということは、ここにあいつらのスパイが!？」

”ウイイイン…ガシャアン!”

セキュリティが作動し、空気もれを防ぐため、一定間隔にある非常用のシャッターが降りた。

「くそ…」

ガイたちは閉じ込められた。といっても間もなく警備員が来るとは思うが。

「くそ…!」

ガイは悔しそうだった。

「どうしますか…?」

マシューが聞いた。

「とにかく…待つしかないな。問題はこここの警備員たちに俺たちのことをどうごまかすかな…」

その時、

「久しぶりだなマシュー」

「!？」

そこの現れたのは…なんとマシューの兄のレオンだった!

「に、兄さん!」

レオンは少し怪我をしているようだった。そして小さな銃を持つ

ていた。

「兄さん…」

「だいたい事情は知っているぞマシュー。できればお前は巻き込みたくなかったが…」

「兄さん…どうして…」

「世の中をよりよくするためだよ」

「テロリストが…！何を言うか！」

ガイが言い放った。

「テロリストね…。ならば、かつて細菌兵器をまいた政府もテロリストだと思うが…違うかね？」

「あれは…戦争を終わらせるため…」

「ほう…1000を救うため10を殺す…なるほどな…。それが正しいというなら俺たちのやっていることも正しいということになる」  
「…」

マシューは頭が混乱していた。

「まあ、どのみちお前たちは終わりだ。ガーランドのお前らの仲間は全員死んだ。ローランドのアジトにも、じきに俺たちの仲間が攻撃を仕掛ける」

「…！」

「政府も押さえたしな」

「なに！？どういふことだ！？」

「新しくローランド政府の大統領になったシルベールは俺たちの仲間だ」

「なんだと！？」

「あれも完成したし…俺たちの勝利はもうすぐだ」

「あれ…？」

「マシュー、知っているか？俺たちの住んでいた村で細菌兵器で死んだのは765人だったな。しかしあの村の人口は800人だった。生き残ったやつらは今何をしていると思う？」

「さ、さあ…」



「全員、俺たちの組織にいる。皆、なんらかの身体的障害はあるがな」

「そんな!?!」

「俺たち以外にも生き残った人は大勢いたんだ。だが政府はそれを隠していた。そして、ほつたらかちにされた…」

「そんな…」

「都合の悪いことはすべて隠す。弱者など切り捨て。それが政府だ。それが人間だ」

「…」

「俺の役目は終わった。マシュー、お前には言ってなかったが俺はあと2〜3ヶ月の命なんだ」

「なんだって…?」

「細菌兵器の影響さ。肺をやられている。俺はあの時、お前より20分くらい逃げ遅れたからな」

「そんな…兄さん…」

「マシュー…さらばだ」

”バン!”

「!?!」

なんとレオンは自ら頭を打ちぬいた。

「兄さん!」

レオンは倒れこんだ。その顔は安らかだった。

「兄さん!」

その時、シャッターが開いた。そして警備員が数人、入ってきた。

「お前たち、手を上げる」

「動くんじゃない!」

数時間後。

マシューたちは取調べを終え、出てきた。マシューたちは、たまたま現場に居合わせて興味本位で中に入ってしまったと嘘をついた。ここにいる三人以外は知らない人物だと言った。

もう帰りのシャトルは出てしまっているので、三人は簡易ホテルに泊まり、翌日の朝にも帰りの便があるので、その便で帰ることにした。

翌日。

マシュー、ガイ、レイミアは、惑星ローランドに帰ってきた。三人とも元気がなかった。シャトルの空港の大型テレビではニュースが流れていた。

「…というわけで、シルベール大統領はこれ以上暗殺が続くようならば自衛軍の出動もありうると述べました。ガーランド政府、ローランド政府、双方共に緊張は高まっております、国民は不安な日々を過ごしております。万が一にも、戦争に発展しないことを祈るばかりです」

もはや、三人はあきらめかけていた。

「とにかく…アジトに戻るっ」

三人はアジトに戻ることにした。しかし、

「なんてことだ…」

アジトに帰ってきた三人。地上の小屋の部分はめっちゃめっちゃに壊されていた。

「…」

ガイは無言のまま、くずれたドアを押しつけ、中に入ってしまった。マシューとレイミアも入ってしまった。

「ボ、ボス…」

「ビット！」

なんとパソコンのエキスパートのビットがかろうじて生きているようだった。だが撃たれている。おそらく助からないだろう

「へへ…すいませんボス、やられちゃいました…」

「ビット！」

「そ、そっちはどうでしたか？」

「ビット…すまない…俺たちも駄目だった…」

「そうですか…」

「やつらはいつ来たんだ？」

「つい2時間ほど前です…」

「くそっ…！」

「ボス…いつか…あの世で会いましょう」

ビットは息絶えた。

「ビット！ビット…！」

マシューは悲しみを通り越して怒りがわいてきた。

「…」

レイミアは目をつぶっていた。そして祈るように胸の前で手をあわせた。

しかしその時、

”ヒュン！”

ボーガンの矢がレイミアにむかって飛んできた。

「危ない！」

マシューはレイミアかばった。

”ビシュ！”

「うわっ！」

矢はマシューの肩のあたりに刺さった。

「マシュー…！」

「くく…！」

片膝をつくマシュー。しかしその時、

”ヒュン！”

さらに矢が飛んできた。

「危ない！」

”グサア！”

ガイがマシューをかばった。そして矢はガイの胸に突き刺さった。

「ガイさん！」

ガイは目を見開き、大口を開けたまま前に倒れこんだ。

「ガイさん！ガイさん！」

「マシュー…レイミア…に、逃げる…」

うつろな目で必死にしゃべるガイ。その時、

「また会ったなマシュー」

以前マシューの家に来た男が現れた。今度はヘルメットはかぶっていない。そして後ろには妙なピエロの仮面をつけた男がボーガンを持って立っていた。

「お前は…誰だ？」

痛みをこらえながら、マシューは聞いた。

「私はガダス。クロスバードのリーダーだ。以前、君の家にお邪魔しただろう？」

「クロスバード!？」

「長かった…。しかしあと一週間だ。すべてが終わり…そして始まる」

「…」

「君はレオンの弟だ。そして私と同じ最後の悲劇の村の生き残り。だから命だけは助けてやる」

「最後の悲劇の村の…？お前も…!？」

「そうだ」

衝撃の事実だった。

「何をやる気だ？」

「一週間後…ローランド政府の大統領シルベルはガーランド政府に攻撃を仕掛ける。そうなったら間もなくして戦争になるだろう。」

そしてその混乱の最中、私たちはローランド、ガーランド両政府に新型の細菌兵器をまくのだ。月に用意してあるミニ・シャトルを使ってな

「なに!？」

「そして私たちが人々を助ける。すでにあるワクチンを使ってな」  
レオンが言っていた「あれ」とは、新型の細菌兵器とワクチンのことだった。

「ワクチンを人々に提供し、支持者を集め、新政府を樹立。そして

世界は平和になる」

「……」

「そして…導師ゼロの教え、クロスバード教を世界唯一の宗教として世の中を統一するのだ」

「導師…ゼロ!?!」

「まあ…黙って見ておくがいい。細菌兵器には気をつけてな、ふふふ…」

そう言うとガダスは去っていった。

「…うつ!」

マシユーは突然はげしい痛みに襲われた。麻痺してきた感覚が元に戻ったのだ。

「が…」

マシユーは倒れこんだ。

「マシユー! マシユー!」

レイミアの叫びが、暗雲の空の下、空しく…そして悲しく響きわたった。

三日後。

この三日間、レイミアはアジトでマシユーを看病していた。マシユーは三日間ずっと寝ていた。時には激しくうなされながら。地上の小屋はボロボロにされていたが、地下の本拠地はほとんど壊されていないかった。ただパソコンはめちゃめちゃにされていた。そして金目のものや食料はなくなっていた。しかしベッドなどは無傷だった。

「うつ…ん…」

ようやく目を覚ましたマシユー。

「…」

まだ頭がボーっとしている。ふと見ると、レイミアがベッドわきで椅子に座り、ベッドにうつぶせになり眠っていた。

「レイミア…」

マシユーはレイミアがずっと看病してくれていたことを理解した。  
「……」

マシユーはレイミアに心から感謝した。そしてある感情が芽生え始めた。その時、

”ピピピピピ”

マシユーの携帯電話が鳴った。

「ん……」

レイミアは目を覚ました。マシユーは慌てて電話に出た。

「もしもし、マシユー？」

「あーハロルドさん……ですか？」

「ああ、そうだ。マシユー、お前いったいどこにいるんだ？」

「えっ？」

見るとレイミアがこっちを見ていた。マシユーは目であいさつし、電話に集中した。

「えと……いや……僕もちよつと……兄みたいに……旅行に……」

マシユーは嘘をついた。

「旅行って……そんなことしてる場合か!？」

「え?そ、そうですね……兄のことも……」

「そうじゃない!」

「えっ?」

「まさか……お前、知らないのか?」

「えっ?」

その夜。

「そんな……」

マシユーとレイミアはマシユーの家に向かった。その光景にしばらく立ち尽くした。なんとマシユーの家が跡形もなくなっていた。火事らしい。

「マシユー……」

ハロルドがマシユーの肩に手を置いた。

「マシユー、こりゃいったいどういことなんだ？」

「…」

「何か心当たりあるか？」

「…」

「それに…そつちの美人さんは誰だ？」

「…」

マシユーはうつむいていたが、やがて顔を上げ話し出した。

「ハロルドさん…とても重要な…そしてとてもなく重大な話があるんです…」

「？」

そしてその時…その様子を遠くから見ているある男がいた。

マシユーは今までのいきさつを事細かくハロルドに伝えた。さすがに驚くハロルド。

「…というわけで、月に行こうと思ってるんです」

「そんなことが…」

ハロルドは信じがたい話に驚くばかりだった。

「信じられないかもしれませんが。しかしこれは真実です」

「…」

「ハロルドさん、どうか力を貸していただけないでしょうか？」

マシユーもレイミアも真剣だった。そして不安だった。

「うーん…そう言われても俺は下っ端だしなあ」

「何か月に行く方法はないですか？」

「月かあ…」

「それに大統領も…止めないと…」

「分かった。あの人に頼んでみよう。あんまり頼みたくないんだが…」

「…」

「あの人？」

「投資家の知り合いがいるんだが…大金持ちで個人のミニ・シヤトルを持っていたはずだ。なんとか取り入って貸してもらおう」

「ほんとですか!」

「金の亡者だが、兵器には投資していない。戦争は嫌いだからな。戦争を防ぐためだと言ったら貸してくれるかも知れない」

「ありがとうございます」

「けど一つ問題がある」

「何ですか?」

「彼は貸してくれるだけだ。ついてきてはくれない。誰が操縦するんだ?」

「あ…!」

マシューはシャトルの操縦など出来ない。ハロルドも。

「私がやります」

レイミアが言った。

「!?!」

「学生時代、パイロットになりたくて研修をうけたことがあるの。でも免許を取るにはすごくお金がかかるからあきらめたんだけど…」

「本当に!?!」

「ええ。やってみるわ」

「けど本物を操縦したことはないんだろう?」

「ええ。でもやるしかないわ。そうでしょ?マシュー」

「そうだな…。やるしかない。やるしかないよ」

「…」

ハロルドは不安だったが、やはり、やるしかないと思っていた。

「よし!じゃあ明日また連絡するよ」

「お願いします」

「君らも気をつけてな」

ハロルドは去っていった。

その深夜。ハロルドの携帯電話に後輩のベックから電話がかかってきた。何やら極秘の情報が入ったので今すぐ会いたいというのだ。クロスバードについての話だという。



「ベックのやつ…こんな所に呼び出すなんて…」

そこは閉店したコンビニの近くだった。人気はない。

「あいつ…先に来てるって行ってたのに…どこにいるんだ？」

その時

”ビュッ！”

「うわっ！」

突然ボーガンの矢が飛んできた。ハロルドは何とか避けた。

「な、なんだ！？」

矢の飛んできた方向を見ると、不気味なピエロの仮面が見えた。

前にガダスと一緒にいた奴だ。

「な、なんだお前は…？」

ハロルドは焦った。ハロルドは武器になるようなものは持ってきていなかった。

(まづいな…)

ハロルドはあたりを見渡した。しかし武器になるようなものは落ちていなかった。

(くそ…)

「…」

無言のままボーガンを構えるピエロ男。

「お前は誰だ！？」

「…」

当然のごとく、何も答えないピエロ男。

「ベックはどうした？お前ベックを殺したのか？」

「…」

ピエロ男は黙ったまま近づき、矢を放ってきた。

「くっ！」

なんとか避けるハロルド。ふと下を見ると空き瓶が転がっていた。

「くそっ！」

ハロルドは空き瓶を拾い投げた。

「！」

ピエロ男は避けた。しかしその隙にハロルドはピエロ男に近づき、腹に一発食らわせた。

「おっ！」

思わず声が出るピエロ男。しかしピエロ男も蹴りを放ってきた。

「くっ！」

ハロルドは両腕でガードした。少し距離ができた。ピエロ男はボ  
ーガンをハロルドに向けた。

「！」

しかしハロルドは神業とも言える読みで矢を避けた。

「くっ！」

しかし矢は腹をかすめた。少しだけ血が飛び散った。

「！……」

だがこの距離で矢を避けられたことでピエロ男は焦り、次の矢の装填が遅れた。

「はあ！」

ハロルドはその隙を逃さなかった。そしてピエロ男の顔面に思い切りとび蹴りを食らわせた。

「ぐわあ！」

ふつとぶピエロ男。ハロルドはなかなか強かった。いや、かなり強かった。

「動くな！」

ハロルドは倒れたピエロ男に乗りかかり、ピエロ男が所持している矢を喉もとに突き立てた。

「……」

ピエロ男にはすでに戦う力はなかった。

「お前は誰だ？」

ハロルドはピエロの仮面を取ってみた。

「な、なに！？」

なんとそれはベックだった。

「お前……」

ハロルドは驚いた。

「はあ…はあ…」

ベックは口から血を流していた。

「さすがだな…ハロルド…先輩…」

「お前…」

「ふふふ…まあいい。どうせ俺たちの勝ちなんだ。あのマシューとかいう奴にもあんたにも…誰にも止められやしない」

そう言うのとベックは自分の服を破った。

「こ、これは…!?!」

ベックの胸のあたりに、小さくクロスバードのタトゥーがあった。

「せいぜい…もがくがいい!」

そう言うのとベックは何か薬のようなものを飲んだ。

「!?!」

ハロルドは見入った。

「うぐぐ…ぐわあ…!」

ベックは震えだし、口から泡を吹き出した。

「!?!」

ハロルドは思わずベックから離れた。そして…ベックは息を引き取った。

「…」

ハロルドはしばらく放心状態だった。そしてマシューの言ったことが真実だったと、今まさに100パーセント理解した。

恐怖が湧いてきた。とんでもないことが起こる…そんな予感がしていた。

翌日。

ハロルドは休みを取った。

ハロルドはマシュー、レイミアと昼飯を食べた。その後、ハロルドの車で例の大金持ちの男の家に行くことにした。男の名前はドルマン。

「ハロルドさん、今日は少し暗いですね」

「ああ…ちよつとな…」

「何かあったんですか？」

「昨日…変なピエロの仮面をかぶった奴に襲われたんだ」

「!?!」

「しかも…そいつは俺の後輩だった」

「それは…」

「いろんな所にスパイがいるみたいだな、そのクロスバードって組織は」

「そうですね…」

「あと3日か…もう手遅れかもな」

「ハロルドさん…」

「まあでも出来るだけのことはしよう」

「はい…そうですね」

ドルマンの家に着いた。豪邸だ。高い壁で周囲を囲んである。

「さて、行くか」

ハロルドは大きな門の前に立ち、インターホンを押した。

「ドルマンさん、ハロルドです」

ハロルドは緊張しているようだった。ドルマンは怖い人なのだろうか。

「…」

返事がない。しかし数秒後、

「ハロルドか？ちよつと待ってくれ」

「はい」

何やら機械が動く音が聞こえた。

”ピピー、ピピー…カチャ”

どつやら鍵が開いたようだった。

「よし行くぞ」

「はい」

マシューとレイミアも緊張してきた。

いったいドルマンとはどのような人物なのだろうか…？

つづく

(後書き)

3に続きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0851s/>

---

ザ・プロジェクト その2

2011年3月31日16時41分発行